濃尾地震

明治24(1891)年10月28日午前6時38分ごろ発生した濃尾地震（規模約8.0）は、我が国の内陸地震としては最大のものである。被害は愛知・岐阜両県でもっともひどく、死者の総計は7,273人、傷者17,175人、家屋全壊142,177、同半壊80,324、橋りょう損落10,392、道路破裂20,067、堤防崩壊7,177、山崩れ10,224に達した。根尾谷の大断層はこの時に生じた。名古屋の尾張紡績工場（レンガ造）はたちまちにして倒れ、当時働いていた430人中38人が死に114人が傷ついた。この地震を契機として、翌年、震災予防調査会が生まれ、日本における、日本人による、日本人のための地震研究の道が開かれたことは案外知られていない。この錦絵は震後の惨状を示している。長良川の鉄橋が墜落、テント作りの仮病院の様子、電信局の崩壊、壊家からの救出など、さまざまな状況をうまく伝えている。岐阜県では救済金や復旧土木費をめぐって不正事件が相次いだとのことである。

（東京大学地震研究所教授　宇佐美龍夫）

大地震後図（東京大学地震研究所提供）

明治廿四年
十月廿八日
大地震後圖